

"窓"

新幹線を降りると、そこは、東京だった。

身体にまとわりついてくる、鬱陶しいくらいの暑さに、思わず眉根を寄せていた。

右を見ても左を見ても、人、人、人。

「ああ、東京に来たんだなあ。」

ぼんやりとそんなことを考えた。

これからディレクトフォースで雲の上の方々とお話しさせていただくというのに、容赦なく照りつける日に、既に帰りたいとまで思ってしまった。

会場のあるビルは、回転式のドアがあり、なんだか都会だなと感じた。3人用のドアなのに、6人で入ったことに緊張しているのかとも思った。会場はクーラーが効いていて、身体にたまった熱を奪い去っていった。その分これからすごい方々とお話しができるんだ、という自覚が強くなっていった。まず、義手についてのお話しを聞くことができた。若いのにこんなに自分を持っているなんて、とてもかっこいいと思った。やりたいこと、楽しいこと、自分で選んで生きる姿は海の魚を思わせた。世界という名の大海を自らの力と仲間と共に泳いでいるような気がした。

待ちに待ったグループでのお話し。背筋はいつもの猫背なんて嘘のようにピンと伸びていて、頭の中は白どころか黒くなってしまっていた。

安達様は、パッパと話を進めてくださった。緊張は安達様のお話しを聞くための神経にとられて消えて無くなった。もっとお話しを聞きたい、知りたいとも思えた。私は、社長という立場になって感じる日本の社会人と海外の社会人とのちがいについて質問させていただいた。安達様は、社員のちがいがわかることが大切だとおっしゃっていた。気持ちを受けとめ、しっかりと利益を配分することにより社員の信頼を得ることが大事なのだそう。そして、日本人は自分の気持ちを論理的に伝えられるようになるべきだともおっしゃっていた。これは世界共通のことであるから、忘れてはいけないものなのだそう。

そして、上司とのつきあい方。これは他の生徒の質問であったが、とても印象に残った。

「逆らうくらいの気持ちがないと大きくなることはできない。」

もちろん、上司のいうことには基本的には従うべきだが、自分の意見を言えるようにならないといつまでたっても上にのぼることはできないのだ。だが、適当なことをいうだけでは信頼はされない。よって、論理的に話を組み立て、相手に理解してもらえるような能力を若いうちから身に付けるべきだとおっしゃっていた。

太田様からは、お金とは手段であり、周りから評価されるから稼げるものなのだということをおしえていただいた。お金がないと生きてはいけませんが、それだけにとらわれてい

ては広い視野は得られないのだとも感じた。そして、社会人になってからも勉強が必要だとも痛感した。太田様は、通勤時間や職場での空き時間にも勉強しているそうだ。この姿勢が太田様が太田様たる所以なのだと感じた。

村上様は、違いばかりを意識せずに共通点をみつけていくことが海外の方とのコミュニケーションのコツだとおっしゃっていた。相手の自分との共通点を見つけられれば、心の距離がぐっと近づき話しやすくなるような気がした。やはり、第一線で働いた方は考え方も素敵だった。ぜひ、共通点を見つきたい。そして、村上様には職業についてのアドバイスもいただいた。第一線で働く方にお話しを聞くのが良いそうだ。というわけで先生、ぜひ、お話し伺わせてください。

時間はあっという間に、むしろ声を上げる時間さえも足りないと思わせるくらいの速さで過ぎていった。動悸が止まらない。呼吸が速い。身体中の血液がふつふつと音をたてて流れていく。自然と上がった口角は私の感情が身体に収まりきらないことを示していた。いつぶりだろう。こんな気持ちを抱くのは。誰かに話したいけれど、自分の中に閉じ込めておきたい。ああ、これが、私が存在する理由か。この感覚を、忘れたくない。忘れられない。そう思った。

次の予定は、文部科学省でのインタビュー。それまで時間があつたので、ふらふらと歩き、ご飯を食べ、おやつを購入した。ガストは全国にある。そして、美味しい。今思い返すとなぜガストに行ったのだろうか。美味しかったが。

私たちは文部科学省のビルの前に立っている。どちらが警備員さんに話しかけるかで互いに譲り合っている。決して嫌な訳ではない。そう、怖いだけである。そうしている間にも時間は過ぎる上に暑くなっていく。久々の制服も手伝って、暑さは倍増だ。伊藤君と二人のグループを組んだときのことを思い出した。

「文科省に行きたいんだけど他の人たちは別のところに行きたいらしくてさー」

そう話している声が耳に入った。私も最初のグループでは外務省に行きたいと他の人が言っていて、本当は文科省に行きたいけれどまあいいかと思っていた。だがしかし、伊藤君の声を聞いたとき、身体が動いた。やはり文科省に行くことを諦めきれていなかったようで、二人で新しいグループを作って文科省に行くことを提案していた。将来は教員になりたいと考えている私には、教育を司っている文科省に行ける機会はのがしたくはないものだった。今、このときの私の選択は正しいものだったと胸をはって言える。

期待と緊張のなか私たちは社会教育課のドアをノックした。私たちの対応をしてくださったのは、山下さんと楠さんという方だった。場を和ませるために、ジェスチャーや砕けた口調で接していただき、私たちはとても安心してお話しを伺えた。素敵な大人だと思った。まず質問させていただいたのは、地域の人たちに教育について興味をもってもらうには、どのような工夫が必要なのかです。教員になったときに地域全体で教育をできたらどんなによいだろうと考えたため、質問させていただいた。お二人の話によると、これは社会教育課の一番の目標なのだそうだ。これを叶えるために今、全国でさまざまな活動を行

っているらしい。私自身も、中学生だったときに地域の人たちと交流を持たせていただいた経験があり、それがどんなに大切で大変なことかが少し理解できる。これを仕事としている方々は、とても偉大なことをしていると思った。教育が変われば国も変わる。小さなことが大きなものに影響していった、その繰り返しが今なのかと思うと、感動した。そして、お二人がなぜこの仕事をしているのかについても伺わせていただいた。お二人とも、最初から文科省で働こうと思っていたわけではなく、別の仕事をしていたり、目指したりしていたようだ。これを聞いて、なにも最初から全て決めて進まなくてもいいのだと思った。少し回り道をして、それを糧としてつなげられるのならば、それは素晴らしいことなのだと思えた。

たのしい時間は過ぎるのが非情に速い。1時間とはなんとも短い。来年はもっと時間をとっていただきたい。

2日目の朝、柄にもなく早起きをした。送られてきた写真は日の出の写真で、なんだか今日も充実した日になる気がした。しかし、メガネが壊れた。突然のアクシデント。だがしかし、なんとか耐えたメガネに大きな拍手を送りたい。いや、とっくに送っていた。素晴らしい。

東大生の方々の案内で、東大を回った。充実した設備は、勉強に集中するためにはとても良い環境だと思った。それに、東大生の方々のお話を聞いていると、それぞれが自分の意見を持ち、自分のことを誇りに思っていることがうかがえた。自信溢れる人というのは、とてもキラキラしていて憧れる。

東大がすごいんじゃない。東大生がすごいんだ。そうかんじた。すみません。東大はすばらしいです。すごいです。東大に入りたいとはあまりおもわなかったけれど、東大生のようになりたいとは思った。東北大学が第1志望だから、東大を目指すつもりで東北大学に臨もうと思う。素晴らしい経験だった。

今回の東京研修は私の人生に大きな影響を、与えてくれた。

息をするよりも自然に、言葉を紡ぐよりも早く、努力をしたい。もう窓は開いている。飛び出す力と勇気さえあれば、私たちはどこへだって行ける。窓から覗く景色で満足してはいけない。ドアでなくとも良いのだ。世界に足を踏み出して、声をあげたい。そう、思った。